



公立大学法人

静岡文化芸術大学

SUAC

# 碧

# い

# 風

SUAC広報誌 Vol.22  
Oct.2026

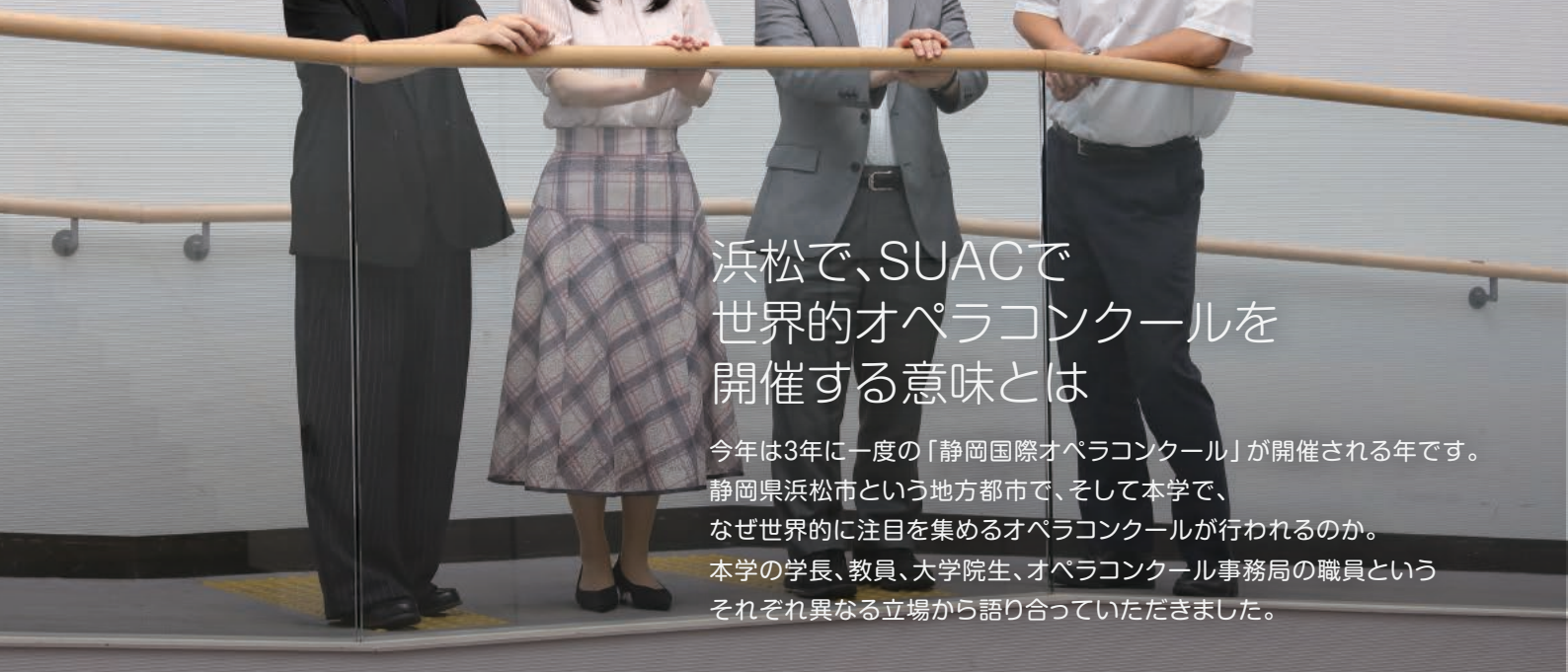
CONTENTS

## 特集 クロストーク

浜松で、SUACで  
世界的オペラコンクールを開催する意味とは

---

SUAC TOPICS / SUAC 研究の「いま」 / 研究室訪問 / 授業紹介  
SUAC さ・ん・ぽ / キャリアオフィスより / 新任教員紹介 / 校友会だより



## 浜松で、SUACで 世界的オペラコンクールを 開催する意味とは

今年は3年に一度の「静岡国際オペラコンクール」が開催される年です。静岡県浜松市という地方都市で、そして本学で、なぜ世界的に注目を集めるオペラコンクールが行われるのか。本学の学長、教員、大学院生、オペラコンクール事務局の職員というそれぞれ異なる立場から語り合っていました。

**地方都市での文化事業について**

**村松**：今年11月に、浜松で「第10回静岡国際オペラコンクール」が開催されます。このコンクールは「国際音楽コンクール世界連盟」に加盟する日本唯一の音楽コンクールです。世界連盟には国際性や公平性、実績など厳しい基準を満たしたコンクールのみが加盟できるので、その意味でも世界から高く評価されたコンクールと言えます。静岡県浜松市という地方都市で、こうした文化事業が盛大に行われることについて、学長はどのようにお考えでしょうか。

**学長**：ヨーロッパに行く、浜松ぐらいの都市には大体オペラハウスがあります。日本だと地方都市にあるのは意外な感じがしますが、ヨーロッパでは当たり前のようにあります。私が留学していたイタリアのボローニャもそうでした。ボローニャと浜松は、ユネスコ創造都市ネットワークに音楽の分野で加盟していて、関係が深いんです。

**萩原**：ボローニャは劇場がすごく古いですね。古くからあるからこそ、街の娯楽の一つとして機能していたわけです。

**学長**：オペラはもともとイタリアのフィレンツェが始まったんですよ。その後すぐにボローニャでも始まり、街の中でオペラがすっかり根付いていったんです。シーズンのオープニングには市長が招かれて、地元の銀行などが幕間のシャンパンを無料で提供していました。

**村松**：それはいいですね。

**萩原**：かつてはシャンパン、無料だったんですか。

**学長**：私が留学をしていた20数年前は無料でした。今はね、お金取ります（笑）。かつては地域の文化のために、地方銀行などが積極的に資金を提供していたんですよ。

**村松**：ヨーロッパではこうした文化事業を行う時に、地元が応援する体制が取られているということなのではないですか。

**学長**：そうですね。生活の中に根付いているので、それはまさに街の人たちのクオリティオブライフ、今というウェルビーイングの要素ですから、特別なことではないわけです。

**萩原**：そうした精神も、企業にしっかりと根付いているんですか。

**学長**：そうです。イタリアで「オペラ」という言葉は

仕事の意味なんです。街の職人たちの中にオペラがあって、音楽作品のことは「オペラ・リリカ」と言います。オペラは創造的な仕事の意味で、誰かに命じられてやる仕事は「ラボーロ」。オペラとラボーロを使い分けているんですね。

**村松**：なるほど、それがまさに創造都市のところでつながっていますよね。

**なぜ浜松でオペラコンクール？**

**村松**：現在、日本国内で開催されている、世界連盟に加盟する国際音楽コンクールは、仙台、東京、浜松につと、大阪、神戸、高松にあります。

**学長**：浜松に二つあるのは珍しいですね。

**村松**：そうですね。ここ浜松が世界的な楽器産業の集積都市で、芸術文化の発展をしっかりと支援しているからそうだと思います。

**宮里**：東京にも二つありますよね。確か今年7月に、港区で開催される音楽コンクールが新しく世界連盟に加盟したので、東京も二つになりました。

**村松**：よくご存じですね。浜松の二つというのはピアノとオペラのコンクールですが、中でも、静岡国際オペラコンクールは、国際的プリマドンナで、静岡県ゆかりのオペラ歌手・三浦環をたたえ、没後50年にあたる年から始まりました。三浦環はブッチー「作曲の『蝶々夫人』を数多く演じたことでも知られ、ブッチー「本人からも絶賛されたそうです。それほど有名なオペラ歌手が静岡県ゆかりの人物と聞いて、どう思われますか。

**萩原**：彼女と静岡県とはどのような縁が？

**村松**：父親が御前崎、母親が菊川で生まれています。また、夫の三浦政太郎が掛川出身で、三浦環自身も掛川に住んでいたことがあるようです。

**萩原**：『蝶々夫人』の初演は、イタリア人歌手が蝶々さん役を演じられて、あまりヒットしなかったんですね。三浦環さんはブッチーに認められ、姿形も日本人ですし、蝶々夫人にぴったりで、作品のさらなる人気に貢献したそうです。

# 碧い風

SUAC広報誌 Vol.22  
Oct. 2026

## C O N T E N T S

- 01 Pick Up Student
- 02 **【特集】クロストーク**
- 06 浜松で、SUACで  
世界的オペラコンクールを開催する意味とは
- 07 SUAC TOPICS
- 08
- 09 SUAC研究の「いま」
- 10 研究室訪問 vol.14 内尾 太一 准教授
- 11 授業紹介/SUACさ・ん・ぽ
- 12 キャリアオフィスより
- 13 新任教員紹介
- 14 校友会だより



## P i c k U p S t u d e n t

### SUACでの学びを、 社会で形にする挑戦

松本 翠里さん

デザイン学部デザイン学科4年  
兵庫県立豊岡高等学校 出身



市内で開催されたインクルーシブイベントでの一コマ。数多くの関係団体の協力を得ながら、企画立案から運営まで携わりました。

コミュニケーションの一翼を担うグラフィックデザインについて学ぶ傍ら、学外での活動にも励む松本さん。

ビジュアルに関するあらゆるものが簡単に生み出せる現代における、「理由があるデザイン」から生まれる人々の関係性に価値を見

出して学びを深める中、教員の勧めで「第10回静岡国際オペラコンクールポスターデザインプロジェクト」に参加。松本さんの作品が見事最優秀賞を受賞しました。デザインとして適切に価値を表現すること、自分の表現の幅を広げることの両方を意識して制作したというデザインが、さまざまな広報媒体で展開され、多くの人の目に触れることについて「自分の表現が人に通じたという

経験に喜びを感じました」と語ります。

また、浜松市のインクルーシブイベントに2年次から参加し、3年次からは運営委員として活動。自分なりの視点と意思を持ち、インクルーシブ社会の実現のために自分ができることを模索しつつ取り組んでいるそうです。活動を通して、「誰もが自分らしくありのままで暮らせる社会」の実現に向け、現実的な行動を積み重ねる人々の姿に感化されたといい、「デザインの視点で企画運営に貢献していきたい」と抱負を語りました。

SUACの魅力として、「常に多様でアクティブな学生や先生と関わり、自分の視野を広げたり刺激を受けたりできること」、「さまざまな活動を受け入れてくれる雰囲気」を挙げる松本さん。「大学での活動を通じて活発な人たちに会ったことで、大学という枠にとらわれず、社会のさまざまな方と関わる機会にも飛び込めるようになりました。自分の判断と行動で歩いていくことを自覚でき、人生に対して主体的になれたような気がします」と話してくれました。

今後は、残りの学生生活で出会う人や活かせる機会を大切にしながら、自分の表現の幅を広げるため、さまざまな制作や活動に取り組んでいきたいとのこと。



ステージの幕と照明、さらに富士山と太陽をモチーフとしたポスターデザインは、コンクールの顔として各種広報媒体で展開されています。



**学長** オペラの初演は失敗することが多くてね、改編を重ねて定番になっていくものですよ。  
**村松** その中で、蝶々夫人はまさに日本人が登場して改めてヒットという形になったんですね。

#### そもそもコンクールとは何か

**村松** コンクールの目的や役割について話をしたいと思います。「コンクール」の意味を調べてみると、「特定のテーマに沿って参加者を募り、技能や作品に優劣をつける競技会」ということで、ただ単に競い合うことだけが目的ではないように思います。この点について、大学院で「コンクール史」を研究している宮里さんにお伺いしたいです。

**宮里** 私が卒論として研究したのは、日本におけるピアノコンクールです。日本のピアノコンクールは当初、発掘や淘汰の役割が強かったんです。それが1970年代あたりからピアノ学習者が二気に増えてくると、アマチュアが参入するようになり、新たに開催されるコンクールの目的や趣旨も、その後の学習への反映を意図する内容に変化して、最近では発表会のような要素を持つものも見られます。ただ、これはピアノの場合なので、オペラとは事情が異なると思います。オペラの世界でキャリアを形成していくとしたら、コンクールも選択肢の一つになりますか。

**村松** 昔はコンクールで賞金を得て生活する人もいたと思います。今はコンクールで生計を立てるというより、自分が売れるための箔付けという要素が強いですね。本当のプロのオペラ歌手は、一つの劇場にずっといるのではなく、いろいろな劇場から呼ばれて公演をするので、コンクールで箔を付けるとか、キャスティング力のある人に認めてもらう活動が重要になると思います。

**萩原** 知ってもらうことが大事ですね。呼ばれるためには自分を知ってもらう。その手段として、コンクールは効果的だと思います。

**学長** 今、話に出たようなプリマ、つまり主役を張る人たちは契約が全く別で、世界中を回るわけです。一方で、ヨーロッパのオペラハウス

などには必ず合唱団やオーケストラが雇用されています。

**村松** 準公務員になるんですよ。

**学長** そつです。ボローニャのテアトロだと、私が調べた時は大道具も含めて約3000人を雇用していました。それが「オペラハウスがある」ということなんです。それとは別に、いわばスーパースターのような人たちが世界中から出てくるので、箔付けが必要になります。コンクールの名前にも作曲家や歌手の名が付いているたりしますよね。

**村松** ベッリーニとか、デル・モナコとか。

**学長** パヴァロッティもそつです。

**萩原** 日本だとジュディッタ・パスタ。オペラ歌手の名を冠したコンクールが熊本で開催されています。そついう有名な方の名が付いていると、人が集まりやすくて、一種のまちおこしにもなりそつですね。

**学長** イタリアのペーザロつて都市、聞いたことないでしょ。でも、ロッシー音楽祭が開催されてものすごい人気です。ロミオとジュリエットで有名なヴェローナでも、毎年夏にアレナ（ローマ時代の円形闘技場）でオペラ祭が開かれ、世界中から観光客が訪れます。だから地方都市とは呼ばない。音楽の分野では首都ですよ。

**萩原** 確かに。イタリアでは何もかも首都に集まっているわけではないですよ。

**学長** そつなんです。日本はちよつと偏つていて何でも東京にあると思つてしまつて。世界から見たら、浜松はヤマハやカワイ、ローランドがあつて、楽器博物館がある音楽首都なんです。

#### 大学がコンクールに関わる意義

**村松** そんな浜松で開かれる静岡国際オペラコンクールは静岡県、浜松市等とともに本学が主催していますが、その意味や意義について話したいと思います。私としては、本学が地域への発信力のある大学で、教育研究と社会貢献を同時に高められる点が良さだと感じています。が、どつ思われますか。

**萩原** 大学がオペラコンクールを行うのは、他に事例のないことなんでしょうか。



や演劇を学ぶ人もいるので、正直、みんなが知つていゝるわけではないのかもしれないですね。

**学長** オペラは音楽というジャンルの中では狭いけど、実は裾野は広いんですよ。

**萩原** 総合芸術ですからね。

**学長** そつ。音楽だけじゃなくて、美術や演劇を含む総合芸術の頂点に位置しているんですよ。

**村松** 今、美術の話が出ましたが、オペラコンクールのポスターは本学のデザイン学部が学生によつて制作され、今回も素晴らしいポスターができました。アクトシティの壁面に掲出されているので、ぜひ見てもらいたいと思います。また、学長からお話があったように、萩原先生や私が講師を務めるオペラの公開講座も開講します。そつてコンクール当日も多くの大学職員や学生ボランティアも運営に携わります。こつて安心して開催できるところが、大学で行つて意味意義につながるのではないかと思っています。

**萩原** オペラの公開講座というこ、音楽系の大学では演奏会を行うことが多いですが、文化講座を開くのが本学ならではの特長だと思つています。今回はデザイン系の先生による衣装のお話もあります。ぜひぜひ珍しつて特別にお話めつて。

宮里：面白つてですね。ぜひ参加してみたいです。

#### オペラコンクールが果たした成果

**村松** これまでの静岡国際オペラコンクールを振り返つてみると、受賞者はメトロポリタン歌劇場やミラノ・スカラ座など、第一線で活躍されています。他の国際的な音楽コンクールでも入賞を果たすなど、世界的に認められる重要なコンクールになっていると思います。

**学長** 3年に一度の開催で、10回まで来たから30年。そこでの優勝者や優秀な成績を残した方が、世界の歌劇場で活躍されているというこは、浜松は日本における音楽首都といえますよね。間違いなくこれは続けるほど重要なレガシーとなつて広がると思います。ヴェネツィア・ビエンナーレは100年以上続く芸術祭ですから、継続することの意味は大きいですね。

**村松** 浜松は楽器産業で有名ですが、楽器産業のまから音楽文化のまちへと変化を遂げている途中ではないかと思つています。浜松もビエンナーレやトリエンナーレのような芸術祭、音楽祭が開ける都市になったらいなと思つています。

**宮里** 浜松にはその土壌があるとは思つています。音楽祭となると、成長途中の人たちがステージ上で競うコンクールとはまた違った盛り上がりを見せそつですね。

**萩原** 考えてみたら静岡国際オペラコンクールは、ほぼプロみたいな方たちが出場されますよね。それほど厳しいコンクールですけれど、音楽祭となると、数日間にとつて開催されるので、交通の利便性が高い浜松にはたくさん人が集まりそつですね。

**宮里** 浜松では毎年ジャズウィークを開催していますが、他のジャンルの音楽祭みたいなイベントは意外にないようですね。

**学長** ジャズを含め、いろいろなジャンルを融合させて、ウィークマンスで開催したらいいと思つています。

**萩原** そつですね。確かに。



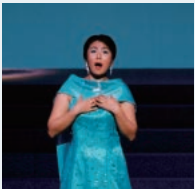
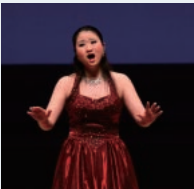
**村松** ・・・では最後になりますが、今回の静岡国際オペラコンクールはかなりレベルの高いコンクールになっています。これまではまだデビューしていない声楽家を中心でしたが、今回はすでに歌劇場で活躍し始めている声楽家なども多く、出身国数も増えて45力国から351名が応募しています。これは、受賞すれば世界への扉が開かれるコンクールと認知されるようになった結果だと思つています。オペラは敷居が高いと思われがちですが、公開講座にもぜひご参加いただいて、11月のコンクールには、自分だけの推しのオペラ歌手を見つけるつもりで足を運んでいただければと思います。

#### よりハイレベルなコンクールに

**学長** 浜松の静岡国際オペラコンクールは、世界の若い才能を迎え、市民と学生が流の芸術に触れる機会を創出することで、ユネスコ創造都市・浜松の文化資本を育てる重要な役割を果たしています。私はペーザロやヴェローナで見たように、音楽が都市のアイデンティティとなり、人々を結びつける力を浜松でもさらに発展させていきたいと考えています。

## 世界へ羽ばたく歴代受賞者たち

本コンクールの入賞者は、ヨーロッパやアジアの歌劇場で活躍しています。歴代最高位受賞者を紹介します。

|                                                                                                                                                  |                                                                                                                                   |                                                                                                                              |                                                                                                                                  |                                                                                                                             |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>第1回 1996年</b><br><br>大岩 千穂:日本/ソプラノ(左)<br>ダイ・ユーキャン:中国/テノール(右) | <b>第2回 1999年</b><br><br>ティグラン・マルティロシヤン<br>ロシア/バス | <b>第3回 2002年</b><br><br>パク・ヒョンジュ<br>韓国/ソプラノ | <b>第4回 2005年</b><br><br>ワシリー・ラデューク<br>ロシア/バリトン | <b>第5回 2008年</b><br><br>光岡 暁恵<br>日本/ソプラノ |
| <b>第6回 2011年</b><br><br>吉田 珠代<br>日本/ソプラノ                        | <b>第7回 2014年</b><br><br>嶋原 奈美<br>日本/ソプラノ         | <b>第8回 2017年</b><br><br>ムン・セフン<br>韓国/テノール   | <b>第9回 2023年</b><br><br>パク・サムエル<br>韓国/バリトン     | 栄冠は<br>誰の手に?！                                                                                                               |

※第1回(1996年)、第2回(1999年)、第6回(2011年)は第1位該当者なし。

## 活躍する日本人入賞者

小堀 勇介 | テノール

第7回 入選・三浦環特別賞受賞 第8回 入選



透明感のある美しい声と超絶技巧によって高音を操ることのできる国内トップのロッシーニ・テノール歌手。端正な表現力により国内外で高い評価を得ている。

山下 裕賀 | メソソプラノ

第9回 入選・三浦環特別賞受賞



朗らかで力強く、爽やかに鳴る音色と豊かな表現力を持つメソソプラノ歌手。英国バーミンガムでの蝶々夫人のスズキ役を皮切りに、国内でも多くの聴衆を魅了している。

伊藤 尚人 | バリトン

第9回 入選



静岡県出身。豊かな響きと深みのある声を持ち、ロシア語を得意とするバリトン歌手。役柄の心情を丁寧に表現する演唱に定評があり、今注目の若手オペラ歌手である。



本コンクールは若い才能を世界へ送り出す登竜門として、入賞者の多くが世界で活躍しています。

昨年度はコンクールのプレイベントとして「オペラ県民講座 わたしたちは街の音楽家」を、静岡県内3会場で開催しました。今回は初の試みとして県内の児童・生徒による合唱団体が参加し、個性豊かなステージを披露しました。第2部では小堀勇介氏、山下裕賀氏、伊藤尚人氏による『セヴィリアの理髪師』ハイライト公演が行われ、合唱団との共演も大きな反響を呼びました。

### 第10回静岡国際オペラコンクールの開催について

45の国と地域から351名の応募があり、64名が予備審査を通過しました。いよいよ11月に本選が行われます。

期間：2026年11月14日～11月22日 会場：アクティシティ浜松 大ホール

主催：静岡県、静岡県教育委員会、浜松市、静岡文化芸術大学、静岡国際オペラコンクール実行委員会

お問合せ：静岡国際オペラコンクール実行委員会事務局

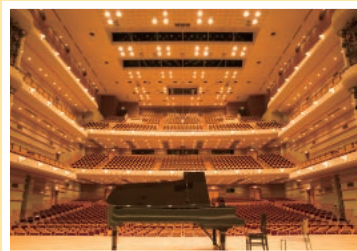
Tel 053-457-6446 E-mail opera@suac.ac.jp



公式 HP



Instagram



# 浜松から世界へ 静岡国際オペラコンクール 30年の軌跡

1996年に始まった静岡国際オペラコンクール。世界中の若きオペラ歌手たちが浜松に集い、その後、多くの入賞者が世界へと羽ばたいていきました。静岡が誇る国際コンクールの軌跡を振り返ります。



### 静岡国際オペラコンクールとは？

静岡県ゆかりの世界的プリマドンナ・三浦環の功績をたたえ、次代を担う若手オペラ歌手の発掘・育成を目的として、没後50年にあたる1996年に創設されました。3年に一度、浜松市のアクティシティ浜松で開催される国際的な声楽コンクールであり、世界で活躍する若手オペラ歌手の登竜門として発展を続けています。世界各国・地域から多くの歌手が参加し、厳しい予選を経て本選の舞台上でその実力を競います。コンクールは静岡県、浜松市、静岡文化芸術大学などが連携して運営し、音楽を通じた国際交流や文化芸術の振興にも取り組んでいます。

### 静岡国際オペラコンクールのあゆみ

|       |                                         |
|-------|-----------------------------------------|
| 1996年 | 第1回「国際オペラコンクール in SHIZUOKA」開催           |
| 2003年 | アジアの声楽コンクールとして初めて国際音楽コンクール世界連盟(WFIMC)加盟 |
| 2005年 | 名称を「静岡国際オペラコンクール」に変更                    |
| 2011年 | 三浦環生誕130年記念事業として関連企画を実施                 |
| 2014年 | 浜松市がユネスコ創造都市(音楽分野)に認定                   |
| 2020年 | 新型コロナウイルスの影響により開催延期                     |
| 2023年 | 第9回コンクールを開催                             |
| 2026年 | 第10回コンクール開催予定(アクティシティ浜松)                |

### 静岡国際オペラコンクールの特徴

静岡国際オペラコンクール最大の特徴は、第2次予選で行われる「オペラ名場面の単独演奏」です。アリアだけでなく、オペラ全曲の中から指定された場面を約20分にわたり演奏。歌唱力だけでなく、表現力や演技力、役作りまで総合的に評価される世界で唯一の方式です。

また、2007年4月より、静岡文化芸術大学が静岡国際オペラコンクールの運営を行っています。大学によるコンクール運営も珍しく、さらに地元企業などからの協力も得て、コンクールは運営されています。



三浦 環 みうら たまき

(1884-1946)

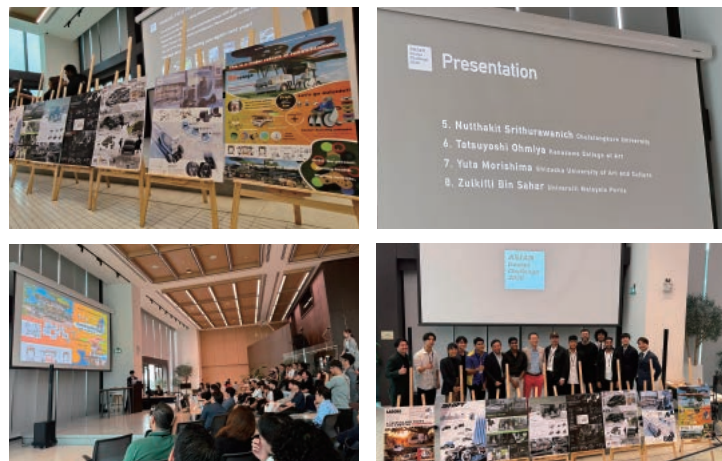
オペラ「蝶々夫人」で世界的な名声を得た日本初の国際的プリマドンナ。日本の声楽界の礎を築き、後進の育成にも尽力しました。父・柴田熊太郎は現在の静岡県御前崎市の出身。母・永田登波は現在の菊川市の出身。さらに夫の三浦政太郎も掛川市出身でした。このため、三浦環自身は東京生まれですが、両親・夫ともに静岡県出身であり、静岡と強い結び付きがあります。彼女の名を冠した「三浦環特別賞」は、本コンクールの大きな特色の一つです。



TOPIC  
3

## タイで開催されたモビリティデザインコンペティション「ASIAN Design Challenge 2026」ファイナリストとしてプレゼンテーションを行いました

デザイン学科4年の森島 悠太さんが、ASEAN地域のデザイン学生を対象としたモビリティデザインコンペティション「ASIAN Design Challenge 2026」の一次審査を通過し、タイ・バンコクで開催された最終審査に出場しました。ファイナリスト8名の一人として選ばれた森島さんは、「Wheels for Innovation」をテーマに、高齢者が入院中も生活の質(QOL)を維持しながら前向きな気持ちでリハビリに取り組める屋外用モビリティを提案。現地でのプレゼンテーションや交流会では、各国の学生やデザイン関係者との意見交換を行いました。



TOPIC  
1

## 河合楽器製作所との共同プロジェクトで「ミニピアノ」を制作しました

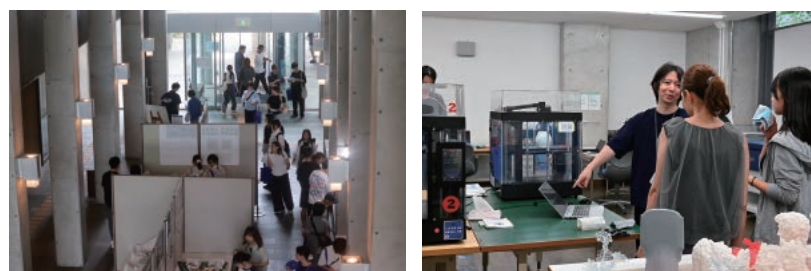
デザイン学科高山研究室は、株式会社河合楽器製作所と連携し、障がいのあるアーティストの作品を活用した「ミニピアノ」を制作しました。本プロジェクトは、障がい者アートを社会的価値のある創造物として広め、作家へ適正な対価を還元する持続可能な仕組みづくりを目指す研究成果の実装です。学生たちは作品を単に印刷するのではなく、「誰がどのような空間で演奏するのか」という視点からデザインを提案。音楽ジャンルごとの利用者像やライフスタイルを想定した意匠を考案しました。完成したミニピアノはJR浜松駅新幹線コンコースや市内ショッピングモールで展示され、多様性と創造性をつなぐ新たな共創事例として注目を集めました。



TOPIC  
4

## 「オープンキャンパス2026」を開催しました

8月8日(土)、9日(日)の2日間にわたり、「オープンキャンパス2026」を開催しました。厳しい暑さのなか、全国各地から多くの高校生やそのご家族にご来場いただき、延べ4,059名の皆さまにご参加いただきました。学科説明をはじめ、模擬授業、学科特別企画、工房見学など、SUACならではの学びと環境を体感できる多彩なプログラムを実施。本学での学びのイメージを、より具体的に描いていただける機会となりました。



オープンキャンパス2026のポスターデザインは、本学屋上の「創造の丘」をモチーフに、デザイン学科3年の畑あかりさんによって制作されました。

TOPIC  
2

## 静岡文化芸術大学の教員2名が、それぞれ全国的な学術団体から表彰されました

国際文化学科の武田淳准教授は、コスタリカ其自然保護政策や気候変動とコーヒー生産に関する研究に加え、コーヒーチェリーの果肉を活用したアップサイクル商品「カスカラティー」の開発・販売などの社会実践活動が評価され、日本環境学会賞(研究奨励賞)を受賞しました。環境問題の解決と持続可能な社会の実現につながる研究と地域社会への還元が高く評価されています。また、デザイン学科の松田達准教授は、全国の建築学生が地域の歴史や文化を学びながら提案を行う「歴史的空間再編コンペティション」を通じた長年の教育活動が評価され、2026年日本建築学会教育賞(教育貢献)を受賞しました。学生の主体的な学びを促し、地域と連携した実践的な建築教育への貢献が認められています。今回の受賞は、本学が推進する社会とつながる教育・研究の成果を示すものであり、教員の幅広い活動が全国的に認められたことを示しています。



国際文化学科武田淳准教授(右)



デザイン学科松田達准教授(右)

SUAC 公式サイト

Webサイトでも本学の教育・研究や在学生・卒業生の活躍など、トピックスをご紹介します。  
<https://www.suac.ac.jp/topics/2026/>



SUAC 公式 SNS アカウント

公式SNSアカウントでは、日々の学内での出来事やイベントなどをご紹介します。



【研究分野】文化人類学

Profile

岡山県出身。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了<博士(国際貢献)> 麗澤大学准教授を経て2023年度より現職。授業では「文化人類学」「多文化とエスニシティ」などを担当。



内尾 太二 准教授  
文化政策学部 国際文化学科

# 未来の災害を考える、それが私のフィールドワーク

—現在の研究テーマについて教えてください。

文化人類学を基盤に、災害と人間社会の関係を研究しています。特に関心があるのは、災害が起きた「後」ではなく、将来起こりうる災害に対して人々がどのように向き合っているのかという点です。

—研究者を目指したきっかけは、何だったのでしょうか。

もともとは学校の教員を目指して教育学部に進学しました。テニスを続けたかったという理由もあり、部活動の顧問をやりたいと考えていたんです。ただ、大学で教員が授業の合間にテニスをしている姿を見て、「こういう働き方もあるのか」と感じ、大学教員という進路を意識するようになりました。

—学生時代の経験で印象に残っていることはありますか。

自転車での長旅ですね。留学中に寮友と2人でスウェーデンからスเปนまで、



2007年夏フランス・スเปนの国境にて

—その経験は現在の研究にもつながっていますか。

ええ。実際に移動しながら文化や生活の違いを体感するという意味で、フィールドワークの原点になっていると思います。異なる土地を連続的に経験することで見えてくる違いの「カンセーション」は、文化人類学的な視点とも重なります。

—大学院では専門を変えられたそうですね。

はい。教育学から文化人類学へ進みました。強い理念というよりは現実的な判断もありましたが、結果的には自分の関心

約1か月かけて走りまわりました。途中で機材の故障や盗難にも遭いましたが、各地で出会った人々に助けられながら続けた旅でした。毎日100キロ近く走り続ける中で、自分の身体が強く変わっていく実感がありましたし、地域ごとに景観や人の振る舞いが少しずつ変わっていくことも印象的でした。

—研究テーマが大きく変わる転機がありましたか。

東日本大震災です。博士課程在学中に発生し、指導教員とともに立ち上げたNPOを通じて被災地支援に関わるようになりました。現地で活動を経験する中で、テーマも災害へとシフトしていきましました。この研究から一冊の著書を出版しました。二冊は、被災地でのフィールドワークに基づき復興過程を描いた『復興と尊厳』も三冊は、3・11の津波が太平洋を越えて各地にもたらした影響を追った『津波の人類学』です。

—現在の研究の特徴はどこにありますか。

自分もそうであったように災害の人類学的研究は、発生後の調査が中心になりがちですが、現在は「起こる前」の社会に注目しています。例えば浜松のように将来の大規模地震が想定されている地域で、人々がどのような意識や想像力を持って日常を過ごしているのか。その在り方を明らかにしたいと考えています。

—今後の研究展開について教えてください。

アメリカ西海岸にも同様に巨大地震のリスクがあり日本との比較研究を進める予定です。それぞれの地域の文化や制度が、人々の備えや避難行動にどのように影響するのかを明らかにすることで、災害時の人間行動の理解につなげていきたいと考えています。

内尾先生が選ぶ一冊

風の歌を聴け

村上春樹著

自転車旅の最中、毎晩テントの中でこの本を読んでいた。黙々と自転車をこぎ続ける日々の中で、読書は大きな支えとなりました。



—研究において大切にしていることは何でしょうか。

まだ十分に考えられていない問いを掘り下げることです。既存の議論をなぞるのではなく、そこに新しい視点を加えることで、世界の理解にわずかでも新しい行を付け加える。それが研究の役割だと思っています。

—最後に、ご自身の研究を一言で表わしてください。

不確実な未来と共に生きる人間のあり方を問いつける研究だと思っています。学生時代の旅や現場での経験も含めて、その問いを深め続けている感覚ですね。



Research Introduction

## SUAC研究の「いま」

研究課題名

### ドナウ派の風景画とその成立背景に関する研究

文化政策学部 芸術文化学科 藪田 淳子



図1: アルブレヒト・アルトドルファー《城のある風景》  
1520-25年頃 ミュンヘン、アルテ・ピナコテーク



図2: アルトドルファー《竜と戦う聖ゲオルギウス》  
1510年 ミュンヘン、アルテ・ピナコテーク



図4: アルトドルファー《キリスト復活》  
1509-16年頃 ウィーン美術史美術館

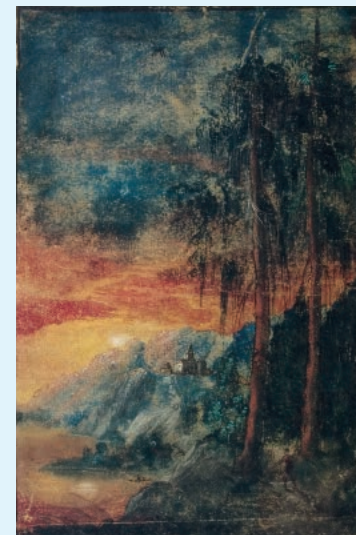


図3: アルトドルファー《夕暮れの風景》  
1522年頃 エアランゲン、エアランゲン=ニュルンベルク大学図書館

皆さんにとって風景というものは、写真に撮ったり、絵に描いたり、とても身近な対象だと思います。西洋で最初の風景画が描かれたのは16世紀のドイツだといわれており、正式なジャンルとしての風景画が成立するのは17世紀のオランダにおいてでした。東洋では、漢時代の中国で山水画が生まれ、日本でも平安時代にはそれが伝来していたことを考えると、かなり遅い成立だといえます。なぜ西洋では風景画が成立するまでに、それほど時間がかったのでしょうか。

西洋美術の源流である古代ギリシアでは人体が美の理想とされ、以後西洋では人物を中心にした神話画や宗教画が中心でした。そのため風景が描かれることは基本的になかったのです。ルネサンスの時代イタリアで古代文化の復興運動が起こり、自然の美が再認識され、ようやく風景表現が登場します。

そんななか、16世紀初頭のドイツで「ドナウ派」と呼ばれる画家たちが、ドナウ川流域で豊かな自然を描きました。それを代表する画家がアルブレヒト・アルトドルファーで、彼は西洋で最初に油彩による風景画(図1)を制作しました。

なぜ美術の中心地イタリアではなく、ドイツで風景画が生まれたのでしょうか。現在のドイツを統治していた神聖ローマ帝国ではイタリアの影響を受けて人文主義思想が広まり、愛国的気運が高まりつつありました。ドイツの人文主義者たちは、学問と芸術の中心地をイタリアからドイツへ移行させることを目指しました。

本研究では、ドイツで風景画が描かれたことを、ドイツ人文主義とそれに関連する愛国主義と関連づけて考察しました。当時のドイツの宗教画には、繁茂する森や樹木が主要なモチーフとして描かれますが(図2)、これは古代ローマの歴史家タキトゥスの『ゲルマニア』において古代ゲルマン人が森を信

仰の対象としていたとする記述が注目を集めたことと関連すると考えられます。またドイツでは「樹木の聖母」の巡礼地が各地にあり、こうした土着の聖母信仰がある種宗教的な樹木信仰と結びついたことも推定されます。

最近注目しているのは、16世紀ドイツの宗教画に見られる朝陽や夕陽の表現です。アルトドルファーは、空を赤く染め、水辺や樹木を照らす印象的な夕陽の水彩画(図3)を描いていますが、こうした鮮やかな太陽の表現が宗教画にも見られるのです。とくにキリストの復活の場面(図4)の朝陽は象徴的です。聖書では、キ

リストの復活は朝に起こったとされ、聖書外典にはキリストが太陽に例えられているのですが、これほど強調された太陽の表現はこの時代のドイツに特有のものでした。私は、このような朝陽や夕陽などの気象表現が登場した背景を、16世紀ドイツで起こった宗教改革や終末思想から研究しています。

風景画には古今東西、様々な歴史があり、それぞれの地域の文化が反映されていて奥深いものです。きれいな風景や風景画に出会ったときには、そのなかに思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

「令和8年度 静岡文化芸術大学 研究成果発表会」のご案内  
教員特別研究で実施した研究成果を、地域や市民の皆様に広く発表し、地域に還元することを目的として研究成果発表会を開催します。

日時 10月29日(木) 14:40~ 場所 静岡文化芸術大学講堂  
入退室自由 YouTube配信実施  
※本学駐車場はご利用できません。公共交通機関や近隣の駐車場をご利用ください。

学生が浜松に描く  
未来の都市空間の青図

デザイン学部科目専門演習  
空間表現技法  
担当：松田 達准教授

「空間表現技法」では、都市空間を対象としたフィールドワークを通じて地域課題を調査・分析し、デザインの視点から都市計画を提案する実践的な学びを行っています。今年度は「15分都市(15-minute City)」をテーマに、自動車に依存せず徒歩や自転車での生活に必要な機能へアクセスできる、暮らしやすく持続可能な都市のあり方を、浜松市中心部でのフィールドワークをもとに検討してきました。

学びの集大成として、新浜松駅近くの「ワーキングスペースA'noy(エニイ)」で開催された都市空間デザイン提案の講評会では、浜松市都市計画課の職員をメンターとして迎え、浜松市中心市街地の現状を踏まえた都市計画について、学生たちがグループごとに発表しました。「通り過ぎるまち」から「滞在するまち」への転換を目指し、既存の建物や公共空間、地域資源を活用した提案が発表され、公園や河川空間をつないだ自転車による回遊、未利用地を活用した交流拠点、空きビルを活用したシェアハウス、アクト通りや遠州鉄道高架下の活用など、多角的なアイデアが示されました。



講評では、既存ストックの活用や浜松らしい地域特性を踏まえた提案が評価された一方、防災機能や事業性、民間事業者との連携、管理・運営方法など、実現に向けて必要となる視点について具体的な助言が行われました。対象地の選定理由や提案の実現可能性などについても質疑が交わられ、学生たちにとって自らの提案を実務的な視点から見つめ直すきっかけとなりました。

本授業の成果は今後、学生らにより冊子としてまとめられ、印刷・製本される予定です。

HAMAMATSU CITY  
**SUAC さ・ん・ぽ**  
～芸術の秋編～

静岡国際オペラコンクールが開催される浜松市。市中心部には、芸術の秋をじっくり味わえる施設がたくさんあります。オペラコンクールの合間に、施設をめくって芸術の秋を堪能しませんか？

**1 浜松市楽器博物館**  
日本唯一の公立楽器博物館であり、世界中の楽器を通じて人類の歴史や多様な文化を学べる博物館です。

**2 平野美術館**  
SUACからもほど近くの民間美術館。日本画などの作品を核に、多彩なアートシーンを発信する地域に根ざした美術館です。

**3 浜松市美術館**  
浜松城公園内にあり、浮世絵やガラス絵、東洋陶磁など約8000点を所蔵する、静岡県内初の公立美術館です。

**4 浜松市鳴江アートセンター**  
1928年築の建物を活用し、イベントや制作場所の提供を行う、浜松市の創造都市拠点の公共文化施設です。

**5 木下恵介記念館  
(浜松市旧浜松銀行協会)**  
浜松出身の映画監督、木下恵介の記念館。建物の設計を行った中村與資平は、静岡県内の公共建築を数多く手がけました。

Updates  
キャリアオフィスより  
Career Office

就職状況報告 (2025年度卒業生・23期生)

全体の就職率は98.0%となりました。売り手市場の状況を反映し、開学以来2番目に高い数字となっています。

業種は、文化政策学部ではサービス(33%)製造(15%)公務(13%)金融・保険(12%)が、デザイン学部ではサービス(45%)製造(27%)建設業(11%)小売(10%)が主な就職先となります。

職種は、文化政策学部では事務(41%)販売(32%)サービス職(10%)情報処理(4%)が、デザイン学部ではデザイン関連職(デザイナー、設計職等52%)が中心となっています。

就職した地域は、東海地方54%、関東地方33%、近畿地方6%となっています。

2026年度卒業予定者の就職活動は、昨年度同様のペースで現在次第に結果を出しつつあるところです。

キャリア支援室では、最新の動向を注視しながら、近隣大学や地元自治体等とも連携し、学生一人ひとりの志望や活動状況に合わせてのアドバイスや求人情報の提供等きめ細やかな支援を行っています。

| 2025年度卒業生：就職状況 | (2026年3月31日現在) |       | (人、%) |       |
|----------------|----------------|-------|-------|-------|
|                | 卒業生            | 就職希望者 | 就職者   | 就職率   |
| 文化政策学部         | 225            | 206   | 206   | 100.0 |
| デザイン学部         | 110            | 98    | 92    | 93.9  |
| 合 計            | 335            | 304   | 298   | 98.0  |

文化政策学部

【就職先】コーセー化粧品販売(株)、(株)静岡銀行、静岡県教育委員会、静岡県庁、(公財)静岡県文化財団(グランシップ)、静岡市役所、ジョルジオアルマーニジャパン(株)、スズキ(株)、(株)スタジオぴえろ、須山建設(株)、第一生命保険(株)、(株)TOKAIホールディングス、トヨタ・コニック・プロ(株)、(公財)名古屋市文化振興事業団、(株)ニッポン放送プロジェクト、浜松市役所、浜松ホトニクス(株)、(株)フジドリームエアラインズ、(株)星野リゾート・マネジメント、ヤマハモーターソリューション(株)、(株)若尾綜合舞台

【進学先】静岡文化芸術大学大学院、香川大学大学院、國學院大學大学院、東京大学大学院、三重大学大学院、早稲田大学大学院

デザイン学部

【就職先】(有)カイカイキキ、(株)河合楽器製作所、(株)クリーク・アンド・リバー社、(株)コーエーテクモホールディングス、(株)GK京都、(株)シミズオクト、(株)昭栄美術、スズキ(株)、(株)スペース、(株)ダッド、(株)丹青社、(株)テクノサイト、(株)中川政七商店、(株)パーク、フェンリル(株)、(株)マーブル、ミサワホーム(株)、ヤマハ発動機(株)、(株)本田技術研究所、リンナイ(株)

【進学先】静岡文化芸術大学大学院、東京藝術大学大学院



**3年生との個人面談**

昨年同様、6月から7月にかけて、キャリアオフィスにて3年生と個人面談を実施しました。

志望する進路(業種、職種、勤務地等)や就職活動に向けての準備状況等を確認し、目指す方向に応じた活動のポイントを説明したり、学生からの質問に答えたりしました。

以前は夏休み明けに行っていた面談ですが、ここ5年ほどは、就職活動の早期化に対応し、学生が夏休みを有効活用できるよう、時期を早めて行っています。本格化してくる就職活動において、3年生がキャリアオフィスを活用し、悩んだ際には気軽に相談できる場として利用できるよう努めています。

「ご家族のためのキャリア説明会」を開催します

「ご家族のためのキャリア説明会」を、碧風祭に合わせた日程で実施します。就職活動の動向についての講演や、各業界で活躍中の本学OB・OGによるパネルディスカッションなどを予定しています。ぜひご参加ください。

**日 程** 2026年11月7日(土) 午前  
学部ごとに分かれて実施します

**会 場** 静岡文化芸術大学 大講義室  
※事前申込みが必要です。詳細は大学ホームページに掲載します。

## ご意見・ご感想をお寄せください

広報誌に関するアンケートにご回答いただいた方の中から  
抽選で3名様に大学ノベルティグッズをプレゼントします。

**応募方法** 2026年11月30日(月)までに、二次元コードより  
アンケートフォームにアクセスし、回答してください。

ご応募・ご回答は  
こちらから



※当選者の発表はプレゼントの発送をもってかえさせていただきます。



フェアトレードコットンバッグ

## 静岡文化芸術大学校友会だより

### 校友会の設立

静岡文化芸術大学校友会は、在学生(学部生・大学院生)、卒業生及びその他の会員で構成される組織です。本会は、在学生の学業や学生生活の充実を支援するとともに、会員相互の親睦を深め、大学の発展に寄与することを目的として、従来の同窓会と後援会に代わる組織として2026年3月に設立されました。今後は、在学生・卒業生がつながるネットワークとして、さまざまな活動を展開していきます。

### 碧風祭2026

碧風祭は、卒業生が母校に集い、懐かしい友人や教職員との再会を楽しむ「Homecoming Day(ホームカミングデー)」でもあります。今年度の碧風祭は、11月7日(土)・8日(日)に開催されます。また、校友会も碧風祭に協賛しています。卒業後も変わらない大学の様子をぜひご覧いただき、懐かしいキャンパスで交流のひとつときをお過ごしください。多くの卒業生の皆さまのご来場をお待ちしています。



### 卒業生向け公式LINEのご案内

校友会では、卒業生会員の皆さまへ最新情報をお届けするため、卒業生向け公式LINEを運営しています。卒業後も大学や同窓生とのつながりを深めるため、ぜひご登録ください。



### 記念事業について

静岡文化芸術大学は、開学25周年を記念して、2027年2月に開学25周年記念事業の開催を計画しています。詳細が決まりましたら、公式LINEや大学ホームページ等を通じてご案内します。記念事業が、卒業生同士の交流や大学との新たなつながりを育む機会となることを期待しています。多くの皆さまのご参加をお待ちしています。

静岡文化芸術大学校友会(卒業生用) E-mail アドレス dousou@suac.ac.jp

## 静岡文化芸術大学基金 (教育研究支援・修学支援事業)

寄附者ご芳名 | 令和7年8月1日から  
令和8年7月31日まで

ご寄附を頂戴した方々のご厚意に心から感謝を申し上げますとともに、  
謹んでご芳名を掲載させていただきます。  
今後、学生が行う海外留学の支援等に充てさせていただきます。  
皆様には引き続きご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

寄附金額 2,475,000円

(内訳:教育研究支援1,335,000円、修学支援事業1,140,000円)

寄附者ご芳名  
(五十音順、敬称略)

【個人】清水 唱平 下位 智 杉山 秀雄  
村松 秀人 横山 俊夫

※ご芳名の掲載を希望されなかった方(10名)を除いて掲載しております

## 新任教員紹介

Introducing New Faculty

### 萩原 里香

文化政策学部 国際文化学科 准教授  
専門領域:イタリア・オペラ/イタリア語

イタリアの舞台芸術、とくに16~17世紀の音楽劇(オペラ)を研究しています。文学・音楽・舞台が一体となった音楽劇が、社会や文化とどのように関わりながら成立・展開してきたのかを、史料や作品をもとに考察しています。近年は、オペラ台本の対訳や作品解釈にも取

り組み、実践の場でも音楽劇に向き合っています。イタリアの文化芸術を通して、作品だけでなく、それを生み出した社会や人々にも目を向け、多様な視点から考える面白さをみなさんと共有できればと思っています。

### 小川 和孝

デザイン学部 デザイン学科 准教授  
専門領域:トランスポーテーションデザイン/プロダクトデザイン

「デザインで人を喜ばせたい」という思いが、私の原点です。経済発展を支える輸送機器、とりわけ二輪車のデザインに魅力を感じ、長年携わってまいりました。「美しいデザインは使われてこそ成立する」という考えのもと、デザインには目新しさや情

緒の価値に加え、技術的・事業的な成立性を含む総合的な視点が不可欠であると捉えています。今後は学生と共に学びながら、グローバルに活躍できるデザイナーの育成と、モビリティによる課題解決および文化の発展をテーマに、教育・研究・制作に取り組んでいきます。

### 山本 彩

デザイン学部 デザイン学科 講師  
専門領域:グラフィックデザイン/ブランディングデザイン

グラフィックデザインとブランディングデザインを専門にしています。近年の研究は、戦前の演劇雑誌を対象に、演劇を平面上に再解釈してきたデザイン手法の分析を行っています。ブランドの発展には、その物語に受け手が共鳴することが必須です。ブランディングデザイ

ンは、ロゴなどの見た目だけではなく、その目標や立ち位置、コミュニケーションのあり方も対象にしています。授業やゼミでは、この視点を持ちながら、学生の皆さんとさまざまな課題に取り組み、新たなデザインの提案をしていきたいと考えています。

### 桒井 孝暢

デザイン学部 デザイン学科 特任助手  
専門領域:デジタルファブリケーション/コンピュータグラフィックス

日常のなかに潜む、見えているのに意識されないものに関心を持っています。以前勤務していた芸術系の大学院で目にした、学生制作の現場から出る大量の端材の行き場のなさが、私の制作の出发点になりました。捨てられた端材、使い古されたプラスチックトレイと

いった物たちをデジタルファブリケーションやコンピュータを介する技術を用いて人間の意識の表面に引き上げる制作と研究を続けています。浜松に来てからも、街の片隅や日々の暮らしのなかで、まだ誰にも気づかれていないものを探し続けています。

### 松本 里穂

デザイン学部 デザイン学科 特任助手  
専門領域:建築設計/まちづくり/建築史

今年度よりデザイン学科特任助手に着任いたしました松本里穂と申します。専門は建築設計です。これまで学校・福祉施設・商業施設・住宅等の設計監理に携わってきました。この経験から建築は技術や表現にとどまらず、人の暮らしや営みに深く関わること、ま

た、年齢・性別・障がいの有無にかかわらず、多様な人々が交流できる建築の必要性を実感しました。このことを踏まえ、学生の皆さんと「社会に開かれた建築」を創造することを考えていきたいと思っています。今後ともよろしくお願いいたします。

### 光延 咲良

デザイン学部 デザイン学科 特任助手  
専門領域:鍛金

金属加工の中でも、私は鍛金技法を主として作品制作に取り組んでいます。見たい景色・大切にしたい記憶を鉄鍛造・溶接で表現しており、作ることには今のこの感情を記録する行為のように思います。

自分自身の手の中で形を変えていく素材の反応や、素材と対峙することで身体がつくりかえられていく感覚がものづくりの面白さです。このようなものづくりの奥深さを身体感覚から一緒に感じていただければと思います。

### 多文化共生の未来を拓く ―ブラジルと日本の架け橋に



#### PROFILE

在浜松ブラジル総領事館 文化広報課

**イノエ ダイキさん**

2020年 文化政策学部国際文化学科 卒業

浜松市出身。2020年、文化政策学部国際文化学科卒業。在学中は学内外で多文化共生に関わる活動に取り組む。卒業後は日本のブラジル人コミュニティのための仕事に携わりたいと、浜松市役所での通訳業務を経て、2022年に在浜松ブラジル総領事館に入職。現在は、ブラジル人コミュニティ関連のイベント主催や支援に加え、静岡県在住のブラジル人に向けた情報発信などに携わる。

私は父がブラジル人、母が日系2世という家庭で、ブラジル国籍を持ちながら浜松で生まれました。小学4年生までをブラジルで過ごし、その後日本へ戻って公立小学校に通いましたが、当初は日本語が話せず苦労し、周囲に助けられながら勉強を続けました。その成果が実を結び、中学生の時に友人に誘われて入った吹奏楽部をきっかけに、ブラジル人だけでなく日本人の友人との関わりも増えました。この経験が大きな転機だったと思います。高校時代には国際交流ボランティアとして、地元で暮らす外国人に日本語を教える活動にも取り組みました。こうした生い立ちから、外国人が暮らしやすいまちづくりに関心を持ち、多文化共生や語学を学べるSUACの国際文化学科を志望しました。

SUAC入学後は、「COLORS」という団体に所属しました。外国にルーツをもつ大学生や社会人で構成され、同じ境遇の仲間同士で悩みを語り合うグループです。活動の一つである定時制高校への出張講座では、自分の経験をもとに高校生に話をしたり、悩み相談に乗ったりし、「進学を諦めないでほしい」という思いを伝えました。話しやすい雰囲気づくりを重ねる中で、少しずつ悩みを打ち明けてくれるようになったことが印象に残っています。

また、SUACでは英語学習に力を入れました。「英語上級」や「ビジネス英語」などを履修し、特に「ビジネス英語」で学んだ実践的なメールのやり取りは、現在の仕事にも生きています。TOEIC対策にも力を入れ、4年生最後のテストでは好成績を残すことができました。

ゼミではライオン先生のもとでネイティブの英語を学びました。英語での卒業論文の執筆で英語力が鍛えられ、さらに模擬国連にも参加して、英語資料の読解やディスカッションを重ねました。また、英語だけでなくフランス語も学び、当時いらった石川清子先生のゼミに参加したり、フランス語のプレゼンテーション全国大会に出場したりもしました。

SUACは先生との距離が近く、授業以外でも将来について相談に乗っていただきました。また学生主体の活動も活発で、ブラジルのお祭り「フェスタ・ジュニーナ」をきっかけに、外国にルーツを持つ子どもや保護者に大学を知ってもらうイベントにも携わりました。これらの活動を通じて、授業だけでは得られない数多くの

経験を得ることができましたね。

そんな中、静岡県の派遣事業を通じてブラジルを訪れ、現地で日本の副領事と話す機会がありました。ブラジルで暮らす日本人コミュニティの活動を知り、日本のブラジル人コミュニティのために働きたいと思うようになりました。

当初はブラジル大使館職員を志望していましたが、コロナ禍の影響もあり、浜松市役所で2年間通訳として勤務した後、この在浜松ブラジル総領事館で働いています。

現在は文化広報課で、イベントの主催、ブラジル人コミュニティ関連イベントの支援、静岡県在住のブラジル人約3万人への情報発信を担当しています。最近では領事の通訳など秘書のような業務も担っています。英語力だけでなく、歴史や文化に関するSUACでの学びが、今の仕事に大いに結びついていると思いますね。今後はブラジル人コミュニティへの発信に加え、日本の方にもブラジル文化に興味を持ってもらえるようなイベント開催に力を入れていきたいです。コミュニティ同士を結び付け、ブラジル人により日本に定着した暮らしができるよう活動を広げていきたいです。



学生団体「COLORS」の活動を通して、自分のアイデンティティや多文化共生について改めて考えるようになりました。高校訪問では進学の魅力を伝え、生徒一人ひとりと向き合えたことが印象に残っています。

#### 編集後記

今号では、今年11月の開催が間近に迫った「静岡国際オペラコンクール」の特集をお届けいたしました。音楽のまち・浜松で開催される、世界的にもトップレベルのオペラコンクール。“芸術の秋”の今こそ、普段はなかなか触れることのないオペラの世界を、ぜひこの浜松で楽しんでみてはいかがでしょうか。

広報誌に対するご意見、ご感想をお待ちしています。第23号は2027年10月の発行予定です。

